

「東京貧困女子～貧困なんて他人事だと思ってた～」を見て
～社会課題は、いつも「誰か」の問題から始まる～

Netflix で配信されているドラマ「東京貧困女子～貧困なんて他人事だと思ってた～」を全 6 話視聴した。

タイトルにある「貧困女子」という言葉から、経済的に恵まれない女性たちの物語だろうと想像していた。しかし、実際に描かれていたのは、単なる経済問題ではなく、現代社会が抱える構造的な課題そのものだった。

登場人物たちは決して特別な人ではない。

大学生、シングルマザー、会社員、介護を担う女性など、ごく普通に暮らしていた人たちが、病気や介護、家庭環境、雇用、性差別、ハラスメントなど、ほんの少しのきっかけで生活が崩れ、貧困へと追い込まれていく。

「自分だけは大丈夫」
そう思っていた人たちが、ある日突然、支援を必要とする立場になる。
その現実決してドラマの世界だけではない。

私は長年、精神障がい者支援や不登校・ひきこもり支援に携わってきたが、そこで出会う人たちもまた、「最初から支援が必要だった人」はほとんどいない。

学校で少しつまずいた。
職場で人間関係に悩んだ。
家族の介護が始まった。
親が病気になった。
子どもが不登校になった。

その小さな出来事が積み重なり、誰にも相談できないまま孤立し、生活が立ち行かなくなってしまう。

そして社会は、その人たちに「努力が足りない」「自己責任ではないか」という視線を向けてしまう。
しかし、本当にそうなのだろうか。

ドラマを見ながら何度も感じたのは、「個人の問題」と見えているものの多くは、「社会の問題」であるということだった。

非正規雇用の増加、男女間の賃金格差、介護や育児を女性が担うという固定的な役割意識、支援制度の使いにくさ、孤立を生みやすい地域社会。

こうした構造が複雑に重なり合い、一人ひとりを追い詰めている。
だからこそ、支援は「困った人を助ける」という発想だけでは十分ではない。
困る前に寄り添うこと。
助けを求められなくなる前に訪ねること。
本人だけではなく家族も含めて支えること。
制度の狭間にいる人へ手を差し伸べること。

こうした「予防」と「伴走」の視点がこれからの福祉には欠かせないと改めて感じた。

私たちが取り組んでいる不登校支援も同じである。
子どもが学校へ行けなくなることだけが問題ではない。
親も苦しみ、兄弟姉妹にも影響が及び、家庭全体が孤立していく。
経済的困窮へつながる家庭も少なくない。
さらに支援が遅れることで、ひきこもりや精神疾患など、より深刻な課題へ発展してしまうこともある。

だから私たちは、訪問看護師によるアウトリーチや家族支援を重視している。
「相談に来てください」ではなく、「こちらから伺います」という支援である。
支援を必要としている人ほど、自ら助けを求められない現実があるからだ。

このドラマは、「貧困」というテーマを扱いながら、私たちにもっと大きな問いを投げかけている。
それは、「あなたは本当に他人事だと思っていますか」という問いである。

社会課題は、決して遠い世界の出来事ではない。

誰にでも起こり得る身近な問題であり、明日は自分自身や家族が当事者になるかもしれない。

だからこそ、社会課題を「自己責任」で終わらせるのではなく、「社会全体で支える課題」として考える感性が求められている。
福祉とは、困った人だけのためにあるものではない。
誰もが安心して暮らせる社会をつくるための仕組みであり、自分自身や大切な人の未来を守るための社会的な備えでもある。

「東京貧困女子」は、貧困という現実を描いたドラマであると同時に、「私たちはどのような社会を目指すのか」を静かに問い続ける作品だった。

その問いに対する答えは、一人では見つからないかもしれない。

しかし、一人ひとりが「他人事」を「自分事」として考え始めたとき、社会は少しずつ変わっていく。

その小さな意識の変化こそが、未来の支援につながる第一歩なのだと思う。

